九月十四日の朝

病牀に於て

正岡子規

青空文庫

朝蚊帳の中で目が覺めた。尚半ば夢中であつたがおい〳〵といふて人を起した。次の間に寢て居る妹と、座敷に寐て居る虚子とは同時に返事をして起きて來た。虚子は看護の爲にゆふべ泊つて呉れたのである。雨戸を明ける。蚊帳をはづす。此際余は口の内に一種の不愉快を感ずると共に、喉が渇いて全く濕ひの無い事を感じたから、用意の爲に枕許の盆に載せてあつた甲州葡萄を十粒程食つた。何ともいへぬ旨さであつた。金莖の露一杯といふ心持がした。斯くてやう〳〵に眠りがはつきりと覺めたので、十分に體の不安と苦痛とを感じて來た。今人を呼び起したのも勿論それだけの用はあつたので、直ちにうちの者に不淨物を取除けさした。余は四五日前より容態が急に變つて、今迄も殆ど動かす事の出來なかつた兩脚が俄に水を持つたやうに膨れ上つて一分も五厘も動かす事が出來なくなつたのである。そろり〳〵と膸皿の下へ手をあてがうて動かして見やうとすると、大盤石の如く落着いた脚は非常の苦痛を感ぜねばならぬ。余は屢種々の苦痛を經驗した事があるが、此度の様な非常な苦痛を感ずるのは始めてゞある。それが爲に此二三日は余の苦しみと、家内の騒ぎと、友人の看護旁訪ひ來るなどで、病室には一種不穩の徴を示して居る。昨夜も大勢來て居つた友人（碧梧桐、鼠骨、左千夫、秀真、節）は歸つてしまうて余等の眠りに就たのは一時頃であつたが、今朝起きて見ると、足の動かぬ事は前日と同じであるが、昨夜に限つて殆ど間斷なく熟睡を得た爲であるか、精神は非常に安穩であつた。顔はすこし南向きになつたまゝちつとも動かれぬ姿勢になつて居るのであるが、其儘にガラス障子の外を靜かに眺めた。時は六時を過ぎた位であるが、ぼんやりと曇つた空は少しの風も無い甚だ靜かな景色である。窓の前に一間半の高さにかけた竹の棚には葭簀が三枚許り載せてあつて、其東側から登りかけて居る絲瓜は十本程のやつが皆痿せてしまうて、まだ棚の上迄は得取りつかずに居る。花も二三輪しか咲いてゐない。正面には女郎花が一番高く咲いて、鷄頭は其よりも少し低く五六本散らばつて居る。秋海棠は尚衰へずに其梢を見せて居る。余は病氣になつて以來今朝程安らかな頭を持て靜かに此庭を眺めた事は無い。嗽ひをする。虚子と話をする。南向ふの家には尋常二年生位な聲で本の復習を始めたやうである。やがて納豆賣が來た。余の家の南側は小路にはなつて居るが、もと加賀の別邸内であるので此小路も行きどまりであるところから、豆腐賣りでさへ此裏路へ來る事は極て少ないのである。それで偶珍らしい飲食商人が這入つて來ると、余は奨勵の爲にそれを買ふてやり度くなる。今朝は珍しく納豆賣りが來たので、邸内の人はあちらからもこちらからも納豆を買ふて居る聲が聞える。余も其を食ひ度いといふのでは無いが少し買はせた。虚子と共に須磨に居た朝の事などを話しながら外を眺めて居ると、たまに露でも落ちたかと思ふやうに、絲瓜の葉が一枚二枚だけひら〳〵と動く。其度に秋の涼しさは膚に浸み込む様に思ふて何ともいへぬよい心持であつた。何だか苦痛極つて暫く病氣を感じ無いやうなのも不思議に思はれたので、文章に書いて見度くなつて余は口で綴る、虚子に頼んで其を記してもらうた。筆記し了へた處へ母が來て、ソツプは來て居るのぞ〈な〉といふた。

子規子逝く

九月一九日午前

一時遠逝せり

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆19　秋」作品社
　　1984（昭和59）年5月25日第1刷発行
　　1991（平成3）年9月1日第12刷発行
底本の親本：「子規全集　第一二巻」講談社
　　1975（昭和50）年10月
入力：渡邉つよし
校正：浦田伴俊
2000年12月12日作成
2005年1月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

九月十四日の朝

病牀に於て

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　正岡子規
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/